

関伽井嶽に毎夜、海中から霊光が上る



長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」のいわき地方辺り（『りゅうのひかり』の見返しより）

四倉海上。毎夜陰火起。大如炬。浜籠川。至阿伽井岳麓。飛懸大杉梢。須臾隠林中。續復上。自初昏至曉。累々乎不斷。不知其數幾。凡月夜則火光薄。暗夜則明。此火獨於阿伽井岳見之。自他處觀之。無一點之光影。亦奇也。故名之阿伽井龍燈。

長久保赤水

江戸時代の地理学者で漢学者の長久保赤水（一七一七—一八〇一）は「改正日本輿地路程全図」という地図などに、関伽井嶽の龍燈のことを書き残している。「関伽井嶽に毎夜、海中から霊光が上る」。龍燈という、その不思議な現象を耳にした赤水は長い間、それを気にかけて、湯本温泉を訪ねた際に関伽井嶽まで行って、自身の目で龍燈を見たという。

「改正日本輿地路程全図」のいわき地方沿岸に記されている、関伽井嶽の龍燈についての記述を、医療創生大学客員教授の夏井芳徳さんは次のような現代文にしている。

四倉沖の海で、毎晩、陰火が発生する。大きさは篝火ほどである。火は籠川（現在の夏井川）を遡り、阿伽井嶽（関伽井嶽）の麓に達し、大きな杉の枝に飛びつき、あっという間のうちに林のなかに消える。このようなことが次々と、夜の初めから翌日の日の出時分まで続く。火は延々と、途切れることなく続き、その数は数えきれない。月明かりのある夜は光が弱く、月明かりのない夜は光がはっきり見える。この火は阿伽井嶽からしか見ることができない。他の場所からは一切、見えない。何とも不思議だ。そのため、この火は阿伽井龍燈と呼ばれている。

赤水によると、龍燈は関伽井嶽の燕石の上からしか見えない。四倉の

浜から夏井川を遡り、関伽井嶽の麓で大杉の枝に飛びつき、林の中に入り込んで消えたり、現れたりする。月明かりのない暗い夜には蛍の光ほどにも、篝火ぐらいの大きさにも見えたりしない。

実は、その火は昼間も上ってきていたが、太陽の光で見えなくなっている。赤水が朝、明るくなって確認してみると、龍燈の経路のうち見える所には川などの水があり、見えなくなる所はものの陰になっているのがわかった。龍燈は、水に浮かんで上ってくるようだった。

茨城県高萩市の時崎清さん（69）は歴史民俗資料館などで「改正日本輿地路程全図」を眺め、関伽井嶽の龍燈の記述が気になった。高萩は赤水のふるさと。長久保赤水顕彰会の会員に現代文にしてもらい、絵本で表現したいと思うようになった。

長い時間をかけて構想を練り、ようやく絵と文を完成して、この春に『りゅうのひかり』（長久保赤水顕彰会・発行）が発刊された。闇夜の海に現れた小さな光が集まって強い光になり、龍に姿を変えて川を遡り、山へ向かう。やがて空が白み始めると光は…。

静かなものがたりを読みながら、江戸から明治にかけての関伽井嶽の燕石からの風景に思いを馳せる。龍燈とは何なのだろう。いまもわからない。

主な記事

レクイエム 新田目 建さん 4

PERSONA 蓼谷 弘子さん 9

常磐病院院長 新村 浩明さんのはなし 10.11